

農作物生産情報

(平成29年7月)

天候

(平成29年6月23日 仙台管区气象台発表 東北地方3ヶ月予報より)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

水稲

中干しで「根づくり」、幼穂形成期深水かんがいで「花粉づくり」、適正追肥で「買ってもらえるおいしい米づくり」を進めよう！

1 生育状況（6月20日現在）

(1) まっしぐら（管内9地点の平均）

平年と比較して、草丈は並み、葉数はやや少なく、 m^2 当たり茎数は少なかった。葉数から判断すると、生育は平年より2日程度遅れていると考えられる。

(2) つがるロマン（管内8地点の平均）

平年と比較して、草丈は並み、葉数は少なく、 m^2 当たり茎数は少なかった。葉数から判断すると、生育は平年より3日程度遅れていると考えられる。

(3) 青天の霹靂（管内10地点の平均）

前年と比較して、草丈は短く、葉数は少なく、 m^2 当たり茎数は少なかった。葉数から判断して、生育は前年より3日程度遅れていると考えられる。

2 水管理

(1) 分けつ盛期～穂首分化期（6月下旬～7月上旬）の水管理

- 1株当たり茎数を「まっしぐら」・「つがるロマン」では20本程度（栽植株数が70株/坪程度の場合）、「青天の霹靂」では18本程度確保した水田では、晴天で高温（平均気温 $20^{\circ}C$ 以上）が続くような時は中干しを行う。
- 中干しには、窒素の過剰発現の抑制、草丈の伸びの抑制、根腐れ防止等の効果がある。
- 中干しは、田面に軽くひび割れが入る程度とし、排水不良の水田では、2回くらい繰り返すと効果的である。
- ただし、生育が遅れている場合や低温が予想される場合は、中干しを行わない。また、幼穂形成期までに必ず終了する。

(2) 幼穂形成期の水管理

幼穂形成期（主茎の幼穂長 2 mm、出穂前25日頃）から穂ばらみ期にかけては、稲の吸水量が多くなるとともに、低温や干ばつに弱い時期に当たる。幼穂形成期に達したら、気温の高低に関係なく水深10cmで10日間の「幼穂形成期深水かんがい」を実施する。

(3) 穂ばらみ期の水管理

- ・穂ばらみ期に当たる出穂前15～7日頃（主茎の葉耳間長が－12cm～＋4 cmの頃（「図-1 葉耳間長の見方」参照）は、最も低温に弱い時期である。日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下の低温になると予想される場合には、可能な限り深水（15～20cm程度）にして幼穂を保護する。ただし、冷水を急に入れるとかえって温度が下がるので、徐々に水深を深くする。
- ・高温時は、4 cm程度の浅水にして水温の上昇を促し、時々水の入れ換えを行い、根の老化を防止する。

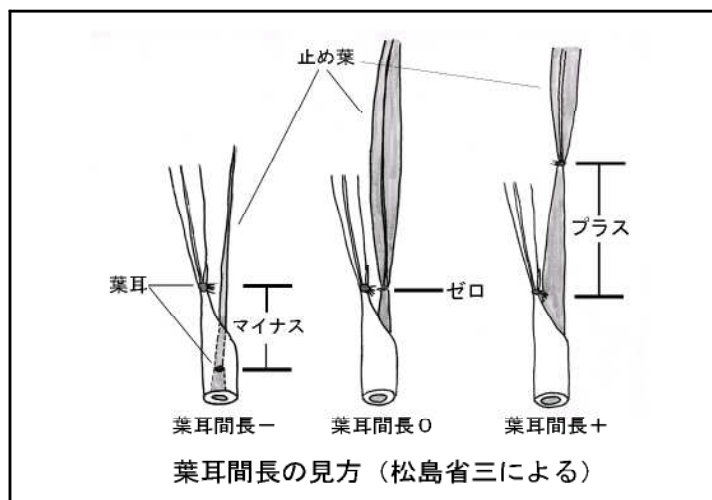


図-1 葉耳間長の見方

表-1 これからの水管理

生育期	寒い日の水深	暖かい(暑い)日の水深	備考
分けつ盛期～穂首分化期（6月下旬～7月上旬）	5～6 cm	中干し	中干しは幼穂形成期までに終える。
幼穂形成期（出穂25日前頃）	幼穂形成期深水かんがい（水深10cmで10日間）		
穂ばらみ期（出穂15～7日前頃）	15～20cm	4 cm 時々、水の入れ換え	日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下で、障害不稔発生の危険が増す。

3 追肥

幼穂形成期（主茎の幼穂長2mm）に達し、かつ肥料が切れて葉色が淡くなっている場合は追肥の適期である。

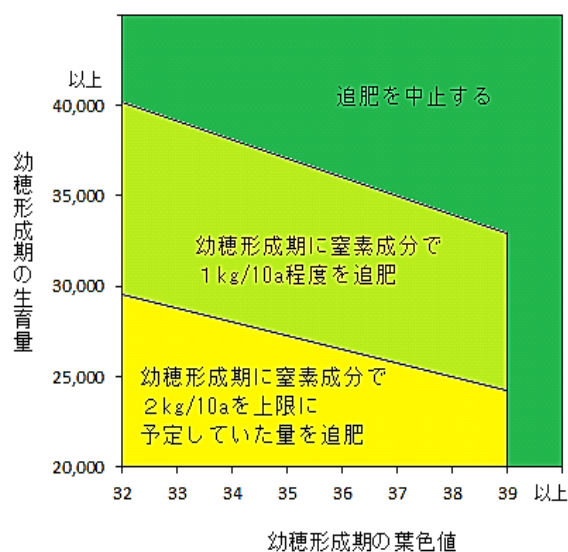
(1) 「つがるロマン」、「まっしぐら」

- ・ 追肥量は、生育状況を見ながら「つがるロマン」では窒素成分で10a当たり2kg以内、「まっしぐら」では2～3kg程度とする。
- ・ 幼穂形成期に達しても葉色が濃い場合は、幼穂形成期後7～10日までの間に葉色が淡くなったら追肥する。
- ・ 幼穂形成期後10日までに葉色が淡くならない場合は、追肥を中止する。
- ・ 出穂前後の追肥（実肥）は、米の食味・品質を低下させるので行わない。

(2) 「青天の霹靂」

- ・ 追肥時期は幼穂形成期とし、それ以降は行わない。
- ・ 「青天の霹靂追肥判断カラースケール」等を用い、実際に生育調査を行った上で、追肥の有無・追肥量を栄養診断基準を参考に決定する。
- ・ 生育後半に土壌窒素発現量が多い水田では、無追肥とする。

生育指標 (幼形期の草丈 × m ² 当たり茎数 × 葉色値)	10a当たりの追肥対応 (窒素成分量)
95万未満	幼穂形成期に窒素成分で2kg/10aを上限に予定していた量を追肥
95万以上 ～ 129万未満	幼穂形成期に窒素成分で1kg/10a程度を追肥
129万以上	追肥を中止する



※幼穂形成期の生育量は草丈×m²当たり茎数で算出、葉色値は葉緑素計で測定。

4 病虫害防除

(1) 斑点米カメムシ類

- ・ 水田周辺の休耕田や畦畔・農道等の雑草地に生息しているので、雑草が開花・結実しないよう刈取や耕起をこまめに行う。なお刈取等は出穂2週間前（7月中旬頃）までに終了する。
- ・ 水稻の出穂以降に雑草を刈り取る必要がある場合は、斑点米カメムシ類に効果のある殺虫剤を水田に散布した後、速やかに行う。

- ・ノビエ、シズイ、クログワイの多発田では、水稻の出穂前から斑点米カメムシ類が水田内に誘引され、斑点米率が高くなるので、除草や防除を徹底する。

(2) 葉いもち

葉いもちの初発生は、近年、6月末から7月上旬に確認されている。初早期発見・早期防除が基本であり、発状況に十分注意し、病気が見つかりしだい防除を徹底する。

(3) 稲こうじ病

穂ばらみ期の低温や日照不足、多雨で発生しやすくなるので、前年発生した水田を中心に、出穂20日前～10日前に防除を行う。

防除時期が遅れる（出穂10日前以降）と、防除効果の低下や薬害の恐れがあるので注意する。

りんご

ていねいな見直し摘果で良品生産を！
黒星病被害果、被害葉は適正に処理しよう！

6月21日現在、県生育観測ほ（板柳町高増）のふじの果実肥大は、横径3.5cmで、平年を上回っている。

1 摘果の見直し

良品生産に向け、一通り仕上げ摘果を終了した園地では、再度園地を見回り、摘果の見落としがないか、障害果や小玉果等の品質不良果がないか点検するなど、ていねいに見直す。

2 袋かけ

ふじは、有袋にすることにより、つる割れの軽減や着色の向上、収穫期の分散ができる。特に本年は大玉傾向で、夏場の多雨によるつる割れの発生が懸念されるので、有袋栽培に積極的に取り組む。

袋かけは、7月10日ころまでに終えるようにする。

3 徒長枝の整理と支柱入れ

病虫害の発生源を少なくし、薬剤の付着を良くするために不要な徒長枝を整理する。また、支柱入れや枝つりを行って樹の内部にも十分日光を入れて葉の働きを高める。

4 病害虫防除

「農薬はりんご園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。」

斑点落葉病やモモシンクイガ、ハダニ類の増加期に入るので、発生動向に十分注意して散布間隔をあげずにスケジュール散布を行う。

(県りんご防除暦より抜粋)

時期と散布量	主な対象病害虫	基準薬剤
7月初め 〈7月1～2日〉 (500 [㍓] ／10a)	斑点落葉病 ハダニ類 モモシンクイガ キンモンホソガ	ピレスロイド剤 ----- アントラコール顆粒水和剤 500倍 又はチウラム剤 500倍 又は有機銅剤 1,200倍 又はオキシラン水和剤 500倍
7月半ば 〈7月16～17日〉 (500 [㍓] ／10a)	斑点落葉病、褐斑病 ハダニ類 モモシンクイガ リンゴコカクモンハマキ	アントラコール顆粒水和剤 500倍 又は有機銅剤 1,200倍 又はオキシラン水和剤 500倍 又はアリエッティC水和剤 800倍
7月末 〈7月31日～ 8月1日〉 (500 [㍓] ／10a)	斑点落葉病 褐斑病 キンモンホソガ ハダニ類 モモシンクイガ	ベフラン液剤25 1,500倍 又は有機銅剤 1,200倍 又はオキシラン水和剤 500倍 又はアリエッティC水和剤 800倍 又はダイパワー水和剤 1,000倍 又はフrintフロアブル25 3,000倍 又はストロビードライフフロアブル 3,000倍 又はナリアWDG 2,000倍

(1) 黒星病

黒星病の被害果や被害葉は、園地に放置せず、土中に埋めるなど適正に処分する。

(2) 腐らん病

粗皮感染による胴腐らの発生が多い園地では、「7月半ば」又は「7月末」にトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍も使用すると、褐斑病と同時防除できる。

(3) 斑点落葉病

随時、不要な徒長枝を剪去する。

急増の恐れがある場合は、ポリオキシシンAL水和剤1,000倍も使用する。

(4) 褐斑病

前年発生が多かった園地では、「7月半ば」又は「7月末」のいずれかにトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍も使用する。

(5) モモシンクイガ

無袋栽培では、毎回防除剤を散布する。

7月初めに食入防止期間の長いピレスロイド剤(バイスロイドEW、サイハロン水和剤、イカズチWDG)を散布した場合でも、モモシンクイガやナシヒメシンクイの発生が見られている園地や周辺に発生源がある園地では、7月半ばのモモシンクイガ防除薬剤を省略しない。

(6) リンゴコカクモンハマキ

第1世代幼虫の発生が多い園地では、フェロモントラップを利用して適期にサムコルフロアブル10 5,000倍、フェニックス顆粒水和剤4,000倍、ディアナWDG10,000倍のいずれかを散布する。

(7) クワコナカイガラムシ

発生の多い園地では、7月中旬～下旬に防除剤による胴木洗いを手散布で行う。

また、6月下旬にバンド巻きをした園地では、7月中旬(卵のふ化前)に忘れずにバンドを除去する。

(8) ハダニ類

殺ダニ剤は発生状況に応じて散布する。

薬 剤 名	使用 倍数	使用回数	使用時期	リンゴハダニ	ナミハダニ
オマイト水和剤	750	1	収穫3日前まで	○	○
ダニサラバフロアブル	1,000	2	前日まで	○	○
コロマイト乳剤	1,000	1	前日まで	○	○
マイトコーネフロアブル	1,000	1	前日まで	×	○
ダニゲッターフロアブル	2,000	1	前日まで	○	○
スターマイトフロアブル	2,000	1	前日まで	○	○
ダニコングフロアブル	2,000	1	前日まで	○	○

※ダニサラバ、スターマイト、ダニコングは同一系統の薬剤であるため、合わせて年1回以内の使用とする。

(散布の目安)

- ・ 1園地10樹について、リンゴハダニは目通りの高さの新梢中位葉10枚、ナミハダニは樹冠内部の新梢中位葉10枚をルーペ等を用いて観察する。
- ・ 1葉当たり1個体でも見られる場合には、すぐに殺ダニ剤を散布する。

5 ビターピット対策

ビターピットは、幼果期(6月)の少雨や夏期を中心とした生育期間の高温によって発生が多くなる。本年は大玉傾向であるので、ビターピットの発生が懸念されるため、カルシウム剤の果面散布を積極的に行う。

○カルシウム剤の使い方

資材名	散布時期(散布間隔)	資材形状	倍数	散布回数
スイカル	6月上旬～9月中旬(10日以上)	粉状	300倍	3～5
セルバイン	6月上旬～9月上旬(10日以上)	粉状	400倍	3～5
アグリメイト	6月上旬～9月中旬(15日以上)	液状	500倍	5

※樹勢の弱い樹や高温時、あるいは干ばつ時には薬害発生(葉縁褐変)の恐れがあるので避ける。

ぶどう

摘房、摘粒により商品価値の高い房に仕上げよう！

生育観測ほ（鶴田町境）のスチューベンの生育は、開花日が平年より1日早い6月20日、満開日は平年より1日早い6月22日であった。

7月は房づくりや病虫害防除などの作業を適期に行う。

1 果房の整形

果粒が小豆粒大頃（果房中間の粒径が5mm程度の頃）に果房の先端を1cm程度切除するとともに、果房の長さが12～13cmになるように果房上部の支梗を切除する。さらに、果房の幅が6cm程度になるように長い支梗を切りつめる。

2 摘房

新梢と果実との養分競合を少なくし、品質向上と枝の充実を促すために早めに行う。

着房数は下表を参考にして、実どまりの状態や結果枝の葉数を見ながら調節する。

<着房の目安>

品 種	結果枝の葉数	着房数
スチューベン、 キャンベル・アーリー	13枚以下	ならせない
	14～18枚	1房
	20枚前後	1～2房
	25枚以上	2房
シャイマスカット	20～25枚	1房

3 摘粒

(1) 摘粒の時期

果房形を整え、粒揃いや果粒肥大を促進するため、満開後15～25日頃（7月中旬）から始め、果粒軟化期前（8月上旬）までに終える。

(2) 摘粒の目安

品 種	着粒数
スチューベン	70～80
キャンベル・アーリー	50～60
シャインマスカット	40～50

4 2回目の摘心

1回目の摘心後に伸びた副梢の展葉枚数が8～9枚になった頃に行い、伸びた副梢の葉を6枚残して摘心する。副々梢は2回目の摘心部位の先端のものだけを残して、他は全てかき取る。

なお、これ以降も副々梢が伸びる場合は3～5葉で摘心を行う。

5 病害虫防除

「農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。」

(県ぶどう防除暦：スチューベン基準より抜粋)

散布時期	薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
大豆粒大 (7月中旬頃)	ジマンダイセン水和剤 1,000倍 又は アミスター10フロアブル 1,000倍 又は ストロビードライフロアブル 2,000倍 又は ホライズンドライフロアブル 2,500倍	アグロスリン水和剤 2,000倍 又は アディオンフロアブル 1,500倍

- (1) 大豆粒大以降、展着剤は使用しない。
- (2) ジマンダイセン水和剤（有効成分：マンゼブ）の年間使用回数は「2回以内」である。
- (3) 晩腐病の発生が多い園地では、小豆粒大頃にベンレート水和剤3,000倍を特別散布する。
- (4) ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及び、同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。ただし、ストロビルリン単剤は年1回以内の使用とする。
- (5) ハダニ類の発生が多い園地ではマイトコーネフロアブル1,000倍又はカネマイトフロアブル1,000倍を特別散布する。なお、本剤は8月以降に散布すると果面汚染の恐れがある。
- (6) コガネムシ類の発生が7月下旬にみられる場合は、アグロスリン水和剤2,000倍、アディオンフロアブル1,500倍、スミチオン水和剤40 800倍のいずれかを特別散布する。

おうとう

次年産の生産を見据え、収穫後の防除を徹底しよう！

1 収穫（晩生種）

適期収穫に努め、収穫遅れにならないようにする。

2 雨よけ被覆資材の除去

樹体に対する悪影響を避けるため、収穫後速やかに除去する。

3 施肥（礼肥）

樹勢維持と花芽分化促進のために、収穫後できるだけ早く予定している年間施用量の20%を施用する。

4 病害虫防除

「農薬は、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。」

(県おうとう防除暦：佐藤錦の基準より抜粋)

散布時期	薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
7月中～ 下旬 (収穫後)	オーソサイド水和剤80 800倍 又はオキシラン水和剤 600倍 又はチウラム剤 500倍	スプラサイド水和剤 1,500倍

- (1) 南陽やサミットなどの晩生種では、灰星病対策として収穫前日までにアミスター10フロアブル又はナリアWDGを特別散布する。
- (2) 褐色せん孔病（せん孔病）や、ハダニ類が発生すると早期に落葉し次年産の花芽形成に影響するので、収穫後散布を必ず実施する。

野菜

◆トマト◆

天候に合わせた肥培管理を行うとともに、病害虫防除を徹底しよう！

1 かん水と追肥

- (1) かん水は、午前8～10時頃に行う。
- (2) 7段花房開花期頃までは、かん水量を一定（1株当たり1.5ℓを目安）とし、生育や天候を見ながらかん水の間隔を調整する（1日おき→2日おき）。ただし、予想最高気温が28℃を超える日は、1株当たり2ℓを目安とする。2本仕立ての場合は、側枝1本を1株として行う。
- (3) 茎葉にしおれが見られたら、直ちに1株当たり0.7ℓかん水し、2～3時間してもしおれが回復しない場合は、再度0.7ℓかん水する（高温時は1株当たり1ℓを2回）。
- (4) 開花花房の上葉のねじれの有無を観察し、ねじれのある株が7割以下になったら追肥する。

2 葉先枯れ（カリ欠乏症）対策

- (1) 葉先枯れ症状は、根張りが悪かったり、土壌中のカルシウムなどが過剰になると、カリの吸収が妨げられて発生しやすい。また、高温により徒長した場合でも葉内のカリが欠乏するので、予防としてメリット黄400倍を3～4日おきに開花花房を中心に葉面散布する。
- (2) 症状が見られた場合は、カーボリッチ又はカリグリーン800倍を4日おきに2回、全葉に散布する。ただし、極端に草勢が弱い場合は使用を控える。

3 高温対策

遮光資材、ハウス塗布資材等を活用して、ハウス内の温度をできるだけ下げようとする。被覆タイプの遮光資材は、概ね11時～14時頃まで展張し、かけっぱなしにしない。

4 病虫害防除

曇雨天が続くと灰色かび病や葉かび病が発生しやすくなるので、予防防除に努める。アザミウマ類の発生が多くなるので防除を徹底する。

◆メロン◆

適切な温度・水分の管理で品質向上に努めよう！

1 ネット発生後の管理

- (1) ネット発生以降は、最高気温28～30℃ 最低気温15～18℃を目安に管理する。
- (2) ネット完成時は換気を十分に行い、日中しおれない程度にやや乾燥気味の管理とする。
- (3) 追肥は葉色や孫づるの伸長を見て、10 a (500本)当たり窒素成分で1～2 kg実施する。
- (4) 葉面散布剤の活用：草勢をみながら3～5日おきに3回程度散布する。

N - P - K

(例)	→	青……生育促進、葉色改善	(7 - 5 - 3)
メリット	→	黄……着果促進、果実・根茎肥大	(3 - 7 - 6)
	→	赤……成熟促進、徒長抑制、花芽分化	(0 - 10 - 9)

- (5) 成熟期の草姿・草勢は、収穫7～5日前で、「晴天日の昼間には少ししおれ、夜には回復するぐらい」が望ましい。
- (6) 最低気温が20℃以上では糖度が上がりにくくなるので、外気の最低気温が15℃以上であれば、トンネルを夜間開放する。

2 果実の生理障害

(1) 裂果

着果後、低温多湿の場合、果肉の肥大に果皮の伸びが追いつかなくなってしまうが発生するが、鶏卵大前まで・ネット形成期・収穫期の3つのステージが特に危険性が高い。

○収穫期の裂果

- ・開花後40日頃まで肥大するが、この間の乾燥・低温+成熟期の潤沢な養水分で発生する。
 - ・多肥や未熟な堆きゅう肥の施用により収穫期に草勢が強まり発生する。
- ※対策として……Ca剤の葉面散布、下葉の除去、徒長枝の除去


(2) 発酵果

窒素・カリ過多、Ca不足、高温・照り込みによる草勢の低下、ホルモン着果、低温・乾燥による初期肥大の抑制などにより発生する。

※対策として……Ca剤の葉面散布、遮光

(3) 腐敗果

病原菌によるものと、生理障害によるものと2つある。

※対策として  病原菌……薬剤散布による予防
生理障害……発酵果と同様

大豆

中耕培土・害虫防除をしっかりと行おう！

1 中耕・培土

- (1) 中耕・培土は根に空気を通し、根粒菌を有効に活動させ、不定根の発生、根系の発達を促進し、さらに倒伏防止効果がある。
- (2) 1回目は本葉2～3葉期に行い、初生葉のつけ根まで軽く土寄せする。
- (3) 2回目は本葉5～6葉期に行い、第1本葉のつけ根まで土寄せする。
- (4) 中耕・培土は、開花10日位前（7月20日頃）に終わる。培土の高さは、コンバイン収穫時に支障がない程度とする。

2 除草

発生している雑草の種類、大きさ、大豆の生育状況に合わせて除草剤を効果的に使用する。

(1) イネ科選択性除草剤の茎葉散布

雑草が大きくなると効果が劣るので、各薬剤の使用時期の範囲内で使用する。

(2) 広葉選択性除草剤の茎葉処理

「大豆バサグラン液剤」は大豆の2葉期以降に使用できるが、雑草が大きくなると効果が劣るので、発生状況に応じて使用する。

(3) 畦間、株間処理

土壌処理、茎葉処理を行っても残草が多い場合は、畦間、株間処理除草剤が利用できるため、薬剤の特性に合わせて効果的に利用する。大豆に薬剤が付着すると薬害が発生するため、泡状ノズルやカバーで飛散しないよう散布する。

3 追肥

(1) 時期

- ・子実の充実の効果を高めるため、開花期前後に実施する。
- ・生育が旺盛な場合は行わない。

(2) 追肥量

- ・窒素成分5～8kg/10aとし、生育状態に応じて加減する。

小麦

適期刈取りに努め、良品質小麦を確保しよう！

1 収穫作業

- (1) つがる市での出穂期は「ネバリゴシ」で平年より5日早い5月15日、「キタカミコムギ」で平年より1日早い5月20日であった。
- (2) 「ネバリゴシ」は出穂後46～50日、出穂後積算気温830～950℃、「キタカミコムギ」は同じく50～55日、900～1,000℃が刈取適期であり、共に子実水分25%を目安とする。
- (3) 「キタカミコムギ」は穂発芽しやすいので、天候しだいでは子実水分30%での刈取が必要になる。この場合は速やかに乾燥機に張り込み、水分25%までは送風温度を40℃以下にして品質低下を防ぐ。

(積算気温からみた収穫期の目安)

出穂期	ネバリゴシ		キタカミコムギ	
	830℃	950℃	900℃	1,000℃
5月15日	7月3日	7月8日	7月7日	7月11日
5月20日	7月7日	7月12日	7月11日	7月14日

注) 五所川原アメダス値(6月23日以降は平年値)で算出
天候やほ場の成熟状況、水分を確認して刈取時期を判断する。

花き

ハウスの温度管理と病害虫の防除を徹底しよう！

◆キク◆

1 今後の作業(輪ギク)

- (1) 上位葉のわき芽かきは、時期が遅れると摘み取った後の傷が大きくなるので早めに行う。
- (2) 摘蕾は、小豆大の頃に中心の蕾を残して行う。

2 病害虫防除

- (1) 白さび病、ハダニ類、アザミウマ類、ヤガ類が発生しやすい時期なので、早期発見、早期防除に努める。ヤガ類は、薬剤の散布に加えて防虫ネット(4×4mm目以内)で成虫の侵入を防ぐことも効果的である。
- (2) 薬剤は、系統の異なるものをローテーションで使用する。

◆トルコギキョウ◆

1 今後の作業

- (1) 十分な換気に努め、可能な限り施設内の温度を下げる。好天が続く場合、短期間遮光（遮光率20～50%）し、遮光資材除去は日射の弱い時に行う。
- (2) かん水は、発蕾期からは徐々に控える。
- (3) 地際から20cmくらいまでの側枝を摘み取り、主茎の生長を促す。側枝の付け根から摘み取らないと再び伸びてくるので、きちんと除去する。
- (4) 主茎の頂花蕾（1番花）は発生したら早めに除去する。また、出荷時に不要となる蕾も早めに除去する。

2 病虫害防除

灰色かび病、アザミウマ類、ヤガ類の早期発見、早期防除に努める。

5～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です

- 安心な農産物生産のため、農薬使用状況を必ず記帳しましょう。
- 農薬使用の際には、必ず使用者の責任で最新の「農薬登録情報」を確認しましょう。
- 短期暴露評価の導入により使用方法が変更されている農薬もあるので、変更後の使用方法に基づいて使用しましょう。
- 鍵のかかる農薬専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

農作業中の熱中症に注意しましょう

～熱中症は適切な予防をすれば防ぐことができます～

- 暑さの感じ方は人によって異なります！高齢の方は特に注意が必要です！
- まわりが協力して、熱中症予防を呼びかけ合うことが大切です！
- 節電を意識するあまり、熱中症予防を軽視しないようにご注意ください！